



映画とその時代 ①



住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

今年もアカデミー賞の季節がめぐって来た。ハリウッドが毎年くり広げるこの一大イベントは、世界中の映画ファンが受賞作の行方に注目する。(映画は時代の鏡)と言われるが、選り抜かれた受賞作は、たしかにその1年の社会風潮そのものを反映し、象徴しているからだろう。

この数年のなかで、昨年のアカデミー賞はとりわけ話題を集めた。フェイスブックの創始者として偶像的な存在となったマーク・ザッカーバーグを主人公とする『ソーシャル・ネットワーク』が年度の半ばから評判を呼び、直前まで本命と見られていたが、ゴール寸前で『英国王のスピーチ』の逆転勝利となった。

この選考プロセスは興味深い。第二次大戦の初期、国家存亡の危機に直面した英国王の苦悩を描いた受賞作は、単なる歴史物を超えて、課せられた使命の大きさに戸惑うひとりの人間を見据えている。舞台劇の映像化であっただけに、ドラマツルギーも緻密で、スタッフも練達な玄人がそろい、いわば伝統的な映画文法と映画の呼吸の緩急を知り抜いた、いかにも端正な(映画のかたち)を備えていた。

一方の『ソーシャル・ネットワーク』は、ほとんど対極と言っていい映像世界だ。この年チェニアに始まった(アラブの春)は、燎原の火の

ように中東に及んでいる。その発火装置とも言えるフェイスブックは、いまや世界中に浸透して、まさに現代を象徴するもののひとつだろう。

ところがこの映画では、その創始者を全く時代のヒーローに仕立てていない。ネットが作り出す巨大な別世界を舞台に、ひたすら揺れ動く若者群像劇のひとりに過ぎず、システム開発の経緯よりも、若者たちの生態に焦点を当てているように見える。

若者たちの自負、競り合い、挫折、速射砲のように飛び交う自己主張。全編饒舌また饒舌の何とも騒々しい映像世界だ。まるで大音量のロックを聴かされたようで、古い映画ファンは到底入り込めない。しかし、ネット世界の泣き笑いを適確に映像化しようとするれば、おそらくこの新しい(映画のかたち)がもっともふさわしいのだろう。

それにしてもこの2作品のデッドヒートは、映画界の迎える大きな転機の予兆かも知れない。

昔ながらの映画を愛するアナログ世代と、いまやネット世界に住むデジタル世代。それぞれの感性の隔たりはますます広がってゆく。今年のアカデミー賞は、どんな展開を見せるのだろうか。—————